

単純明快な作品などひとつもない。みんなそれぞれに、何か大きなものに挑み、気持ちのいいくらいの試行錯誤を繰り返して、複雑で重層的な語り口の中から、必死で信じるに足るものを探し出そうとしている。そしてその中から、おそらく偶然なのだろうが、全ての作品に共通の物語的テーマがはっきりと浮かび上がってきていることに驚いた。そのひとつは、いまや従来の家族はまったく機能していないという点。もうひとつは、男はほとんど役に立たないか傍観者にすぎず、主体は女性の手に握られているという点。…なるほど、そうかもしれない。しかし4人の若い作家たちにとって、そのことは決して悲観すべきことではなく、むしろ希望、世界と映画に立ち向かうための絶好の主題であるように思える。——黒沢清

ふと、昔見たある映画の中のセリフを思い出す。「世界を救うのは子どもや兵士や狂人なんだ」と。子どもとは、疲弊して色彩を失った世界を真新しい視線で再び息づかせるものであり、狂者とは、自分が何者であるか知らぬままに、世界の秩序や意味をかき乱し再生させるものであり、兵士とは、我を忘れて戦いに身を投ずるものであるとするなら、この4本の映画の中では、確かにそのようなものたちが、自ら傷つきながらも生き生きと行動し、世界に新たな光を与えているように見える。奇抜なアイデアや、派手な出来事によって映画を飾り立てることもないが、4本の映画は子どもと兵士と狂者とともに、それぞれの回路で世界に亀裂を生じさせ、映画と世界の新たな接続を試みるのである。——諏訪敦彦

横浜会場
会期：2017年1月28日(土)、1月29日(日)

1/28 (土) 12:30 開場
13:00 『ミュージックのこどもたち』
14:30 『みつこと宇宙こぶ』
15:30 『わたしたちの家』
17:10 『情操家族』

1/29 (日) 12:30 開場
13:00 『情操家族』
14:40 『わたしたちの家』
16:20 『みつこと宇宙こぶ』
17:20 『ミュージックのこどもたち』

○会場：東京藝術大学横浜校地 馬車道校舎
3階大視聴覚室 (103席)

○アクセス：横浜市中区本町4-44
(みなとみらい線「馬車道」駅5、7番出口すぐ)

○料金：入場無料・予約不要
主催：東京藝術大学大学院映像研究科
横浜市文化観光局

東京藝術大学横浜校地馬車道校舎



HP: <http://geidai-film.jp/>
Twitter: @GeidaiFilm_11
Facebook: <https://www.facebook.com/mintomo11/>
お問い合わせ: opengeidai@gmail.com

渋谷会場
会期：2017年3月4日(土)～10日(金)

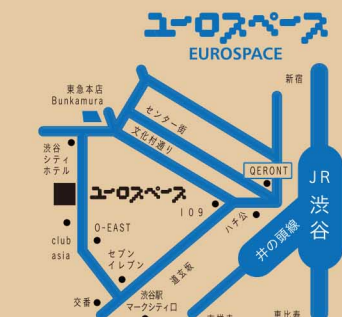
3/4 (土) 『情操家族』
3/5 (日) 『わたしたちの家』
3/6 (月) 『みつこと宇宙こぶ』
3/7 (火) 『情操家族』
3/8 (水) 『ミュージックのこどもたち』
3/9 (木) 『わたしたちの家』
3/10 (金) 『みつこと宇宙こぶ』
『ミュージックのこどもたち』

▶連日 21:00 から上映
▶会期中舞台挨拶・トークあり

○会場：渋谷ユーロスペース

○アクセス：渋谷区円山町1-5 KINOHAUS 3F
○料金：前売券 / 700円、当日券 / 900円(均一)
フリーパス券 / 1500円(会期中何度でも入場可能)

会場ウェブサイト: <http://www.eurospace.co.jp/>
お問い合わせ: 03-3461-0211
主催：東京藝術大学大学院映像研究科



わたしたちは遊ぶ

映画で遊ぶ

この遊びとはなんだろう

いくつか定義がある

ここに二つ、三つその例を示そう

他人の鏡のなかに

自分の姿を映してみること

世界と自分自身とを

素早くそしてゆっくりと

忘れそして知ること

思考しそして語ること

奇妙な遊びだ

これが人生なのだ

——「みんなで映画のつくり方学ぶために友だちに書き送る手紙より
ジャン=リュック・ゴダール

本上映会は東京藝術大学大学院映像研究科映画専攻第11期生の修了制作展です。最初の上映から一年、四通の新しい手紙を書き送ります。



東京藝術大学大学院映像研究科映画専攻 第11期生修了制作展

みんなで映画のつくり方を
学ぶために友だちに書き送る手紙

Vol.2



2017

1/28 sat . 29 sun

東京藝術大学横浜校地馬車道校舎



3/4 sat ~ 10 fri

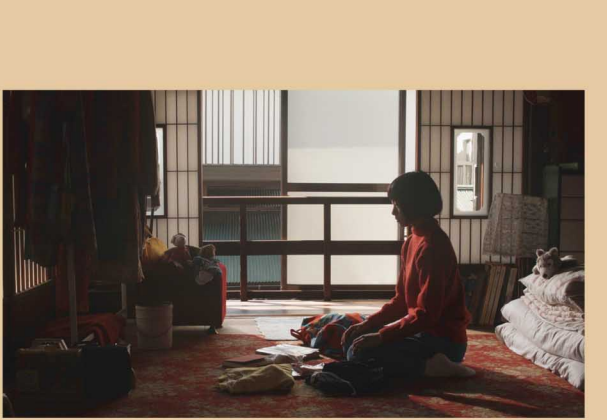
渋谷ユーロスペース



○監督・脚本：竹内里紗○脚本協力：峰尾賢人○プロデューサー：池本凌太郎、関口海音○撮影：松島翔平○照明：諸橋和希○美術：侯捷、王慧茹○衣装：栗田珠似○録音：清水裕紀子○サウンドデザイン：伊豆田廉明○編集：小林淳之介○助監督：川上知来、大杉拓真、山本英○製作担当：崔俊龍○ヘアメイク：熊谷七海○特殊メイク：征矢杏子○音楽：金光佑実○出演：小松未来、金田悠希、島野颯太、宮野叶愛、百合原舞、伊原聖羅、篠崎颯夏、根矢涼香、坂井昌三、永山由里恵

あらすじ／9月20日。晴れ。目に見えない部分だから気になるのかな。最近「こぶ」の中身についてよく想像をふくらませてる。学校に行く道でも、お風呂に入っている、夜に眠れないときも、ずうっと考えちゃう。だって「こぶ」の中身がわかれば、他のことについてもわかるような気がするんだ。

○監督プロフィール→1991年生まれ。神奈川県出身。立教大学映像身体学科・映画美学校フィクションコース卒。大学の卒業制作として監督した『みちていく』が第15回 TAMA NEW WAVE にてグランプリとベスト女優賞を W 受賞し、翌年劇場公開。現在、DVD がレンタル・発売中となっている。DVD には藝大にて1年次に制作した16mm実習の短編『感光以前』も特典として収録されている。



○監督：清原惟○脚本：清原惟、加藤法子○プロデューサー：池本凌太郎、佐野大○撮影：千田瞭太○照明：諸橋和希○美術：加藤瑤子○衣装：青木悠里○サウンドデザイン：伊藤泰信○編集：Kambaraliev Janybek○助監督：廣田耕平、山本英、川上知来○音楽：杉本佳一○出演：河西和香、安野由記子、大沢まりを、藤原芽生、菊沢将憲、古屋利雄、吉田明花音、北村海歩、平川玲奈、大石貴也、小田篤、律子、伏見陵、タカラマハヤ

あらすじ／ある一軒の家には二つの時間が流れていた。14歳のセリは母親の桐子と二人暮らし。セリは桐子が新しい恋人をつくったことに反発している。ある日、セリはお父さんの倉庫からクリスマスツリーを出してきて……。自分がどこからやってきたのかわからない、突然記憶を失ってしまった女、サナ。目覚めた船の中で、サナは透子という女に出会う。あてのないサナは透子の家で暮らし始める。

○監督プロフィール→1992年生まれ。東京都出身。武蔵野美術大学映像学科卒。同大学在学中に監督した『暁の石』がPFFアワード2014に入選。同年業制作の『ひとつのバガテル』がPFFアワード・2015に2年連続で入選、第16回TAMA NEW WAVE にノミネートされる。他に藝大で制作した『しじゅうご仁』『音日記』がある。

『みつこと宇宙こぶ』

2017年／40分／アメリカンビスタ／5.1ch /カラー／DCP

■主人公は13才の女子中学生だ。だから彼女の人間関係は学校を中心として形成されている。にもかかわらず、授業も教師も出てこない。彼女も作者もそういうものまったく関心がないのだ。それより彼女は、驚くべき執着で何でも破壊してまわる。おそらく表面を砕いてその中身を確かめたいのだろう。それが大人になるための通過儀礼なのか、それとも子供の領域だけに許された遊戯なのかはわからない。しかし、一途に突き進む彼女の身のこなしは、有無を言わせぬ感動を呼ぶ。ふとジャン・ヴィゴの名前が浮かんだ。映画はきっと、このような者を肯定するために発明されたのだろう。(黒沢清)



■映画の中のこどもは、多くの場合その可愛らしさを利用されたり、大人が見たいと思う子供らしさを演じさせられたりする。しかし光子がしりとりをしながら商店街を駆け抜けるスピード、横断歩道でフラミンゴのように片足をブラブラさせる立ち姿、セリフの間合いやちょっとした仕草が、彼女を映画世界の中にユニークに思づかせる。撮影、美術、音響も演出を的確に実現しているが、監督が俳優のユニークさを捉え、その身体を生かしながら、一方的な操作に陥らぬよう、共働者として光子を演じる俳優に映画作りに参画させているように思える。そのことで、私たちはまだ子供っぽい光子の妄想を生きることが可能になる。こぶを恋心のシンボルのように扱ってしまえば陳腐なイメージになってしまうが、こぶは光子の言うように宇宙そのものであって、その妄想を生きる狂気が、世界を思づかせるのだ。こぶが消えると、光子は大人になって、この現実世界に帰降する。彼女の身体表現や発語を変化させて成長というものが確かに視覚化されていることが素晴らしいが、光子がさらに別の宇宙を生きる結末を見てみたい気がする。(諏訪敦彦)

○監督プロフィール→1985年北海道生まれ。立教大学映像身体学科卒業。大学在学中に『クーラン・オブティック』が仙台短編映画祭に入選。『帰って来た珈琲隊長』はびあフィルムフェスティバル2015にて上映された。藝大で16mm短編作品『どうでもいいけど』（脚本木村暉）、他に杉野希紀主演のファンタジー短編『Alice』。

『わたしたちの家』

2017年／80分／アメリカンビスタ／5.1ch /カラー／DCP

■暗い古風な家の中で二つの物語が交錯していくわけだが、よくこんなアイデアを思いついたものだ。しかも、その突飛な設定がまったく上滑りせず、あらゆる画面にサスペンスとして機能している。これを実現するには、相当な才能と計算が必要だろう。また、海の向こうがザワザワしていて、妙に気になった。ここは多分どこかの島なのだろうと思うが、ひょっとすると黄泉の国？もしかして、どちらかが幽霊なのか！？そう言えば、冒頭は少女たちが白衣をまとって暗闇の中で揺れているシーンだった。あれが恐ろしい物語が始まる予兆だったのか！！興味は尽きない。(黒沢清)



■目覚めると記憶を失っていた女は自分が誰であるのか分からないまま、偶然に出会った女と共同生活を始める。亡くした父の面影と、新しい母親の恋人との間で揺れる少女の日常。全く関係のない二つの物語が、いわゆる平行世界として同じ一軒の家屋で進行してゆく。二つの別の脚本を、一軒の家屋を舞台に撮影するという実験は、とすれば作り手の作為が透けて見えるようなものになりかねないが、この作品が魅力的なのは、平行世界を俯瞰して操作するような作者の視点を消し去り、ただポリフォニックに響き合う二つの世界の音楽に耳を傾けるように寄り添い構成されていることにあるように思える。1＋1が2になるのではなく、互いに依存することも葛藤することもなく、ただ1と1としてあることで世界を開いてゆく。その「開かれ」に風が吹き込むように、それぞれが奏でる淡い物語はやがて溶け合って、世界をみずみずしく思づかせるのである。(諏訪敦彦)



○監督・脚本・編集：佐々木健太○脚本：木村暉○プロデューサー：池本凌太郎、渡邊健悟○撮影：龍浩鋳○照明：上野陸生○美術：美崎玲奈○衣装：栗田珠似○衣装協力：山崎忍○サウンドデザイン：川神正照○サウンドデザイン助手：仲間章雄○記録：李奥洋○助監督：野頭雄一郎○俳優担当：小林のんき○製作担当：森田雄司○音楽：高橋宏治○出演：伊東茄那、中崎敏、新津ちせ、鎌滝秋浩、長内映里香、生津徹、菊池美美、小林永実

あらすじ／女子高生のマーフは、幼い時に母を亡くし、実父と義母、そのこどもである6歳のまあやと暮らしている。しかし酒に溺れる父には乱暴に扱われ学校でも孤独な生活を送っていた。夢見がちな幼いまあやとだけはいつも一緒にいる。ある日、森に迷いこんだマーフたちは、狩猟を生業とし、森の入り口に建つ古びた一軒家に住むマサとその叔父の次郎に出会う。マサと過ごす日々に、亡くなった母親の記憶やなつかしいたを思い出すマーフ。音楽とうたのあふれるふしぎな森から、こどもたちの新たな旅が始まる。

○監督プロフィール→1985年北海道生まれ。立教大学映像身体学科卒業。大学在学中に『クーラン・オブティック』が仙台短編映画祭に入選。『帰って来た珈琲隊長』はびあフィルムフェスティバル2015にて上映された。藝大で16mm短編作品『どうでもいいけど』（脚本木村暉）、他に杉野希紀主演のファンタジー短編『Alice』。



○監督：竹林宏之○脚本：今橋貴○プロデューサー：池本凌太郎、井前裕士郎○撮影：城田征○照明：上野陸生○美術：侯捷○衣装：栗田珠似○録音：伊豆田廉明○サウンドデザイン：清水裕紀子○編集：小林淳之介○助監督：西川達郎、大杉拓真○製作主任：林宏妍、鈴木麻衣子○ヘアメイク：橋本申二、中麻衣子○音楽：久徳亮○出演：山田キヌヲ、韓英恵、遠藤史人、松田北斗、川瀬陽太、柳谷一成

あらすじ／冬休み、小学校教師・小野今日子は勉強に遅れがある生徒・鉄平の補講授業を行う事になる。今日子は、鉄平の母・美映と不思議な絆で結ばれるのであった。一方、冬休みの合宿に行っていたはずの今日子の息子・三四郎が、なぜか万引きで捕まったという報が入り、ある隠し事をしている事が発覚するのだった……。

○監督プロフィール→1988年生まれ。福岡県出身。明治学院大学文学部芸術学科に入学後、映画史を学び、映画制作を始める。主な監督作に『ハチとミツ―新しい季節―』(14)『帰れないふたり』(15)『ジョンとヨーコ』(16)がある。

『ミュージックのこどもたち』

2017年／75分／ヨーロッパンビスタ／5.1ch /カラー／DCP

■ 毅然と憎しみの感情を爆発させる主人公のたたずまいが美しい。憎しみが美しいというのが粋である。映画のヒロインとはこうでなければならぬ。家の内から外へ、あるいはその逆へ、彼女は自分の居場所を見つけようと絶え間なく移動する。まるで映画そのものが居場所を見つけ出そうとしているかのよう。それにしても、ここはいったいどこだろうか。街のような森のような、この世のようなあの世のような…全ての境界線が曖昧になった一種の寓話的世界で、コミュニティの崩壊と再生が思いのほか壮大に描かれる。それと、森の中で突然行われる情事がまことにエロチックだった。(黒沢清)



■ 映画は、たとえどんなに荒唐無稽な世界であっても、それを「信じる」ように仕向けられる。その世界に綻びがないよう細心の注意が払われる。しかし、ここでは映像と映像が相互に補いながら一つの出来事をスムーズに了解させるよりもむしろ、断絶し、エッジを際立たせ、世界は軋みはじめる。しかし、震えのようなその綻びには、何かのつぎきならないアンビバレンツな力学が働いており、そこに「映画」と向き合う作者の精神が現れていると思う。山間の古い家屋で世界と隔絶し、統によって「命を頂いて」暮らし、やがて気球で好きなどころへ自由に飛んで行こうとするマサたちの暮らし＝孤立したユートピアが箱庭のように描かれるのであるが、地上にもはやユートピアが不可能であるとすれば、本当に空を飛んでいかなくてはならないのかも知れない。しかし、私たちは目に見えるものよりも、この軋み（音楽）こそを信じるべきなのだ。冒頭のマーフの微かな歌声が、やがて、堂々とした死者とのコーラスとして響くとき、音楽はその綻びから物語を超えて世界へ染み出すような感動的な響きを湛えている。(諏訪敦彦)



○監督プロフィール→1988年生まれ。福岡県出身。明治学院大学文学部芸術学科に入学後、映画史を学び、映画制作を始める。主な監督作に『ハチとミツ―新しい季節―』(14)『帰れないふたり』(15)『ジョンとヨーコ』(16)がある。

『情操家族』

2017年／80分／アメリカンビスタ／5.1ch /カラー／DCP

■ 面倒見のいい女教師が、何でもかんでも面倒を背負い込み、実に面倒臭いことになっていく物語。それにしても素晴らしいヘンな映画だった。まず主人公を含めて大人たちがみんなヘン。あまりにもずけずけと物を言う。家の構造もヘンだ。熟演する山田キヌヲが部屋を飛び出してクリスマスツリーか何かを押し倒すバルコニーのような場所のヘンさ。別れた夫がどうやら海辺の堤防と思われる場所で、突然タップダンスを踊るシーンでそのヘンさは極まる。息子もつられてタップを踏むのだが、これまで見たことのない異様な光景だった。テッペイという子供だけが唯一マトモで、物言わぬ彼のたたずまいが不思議と印象に残る。(黒沢清)

■ 小学校教師今日子は、彼女を取り巻く世界を律儀に秩序づけようと奔走し、同時にその過剰な行動によって世界を攪乱するトリックスターである。主婦仲間の下らない雑談から立ち去る今日子が、突如直角に方向転換して走り出す後ろ姿のように、彼女には他人や自分に見せようとする私と、彼女を突き動かす衝動の間をとりまとめる中間というものはなく、その変化は不意打ちとして周囲をたじろがせるのだ。しかし、不意打ちを食らうのはむしろ彼女のほうである。彼女の秩序は彼女だけのものであり、世界のほうは常に今日子の期待を裏切るように出現する。奇人、変人による（スクリーンボール）コメディというジャンルに敬意を払いつつ周到に造形された脚本が素晴らしいが、一歩間違えばから騒ぎに陥るかもしれない狂気の主人公と世界との喜劇的対決を、俳優の演技、身体を信頼し、活写する演出の手腕がしなやかに恐ろしいほどに冴えている。(諏訪敦彦)

○監督プロフィール→1992年生まれ。東京都出身。武蔵野美術大学映像学科卒。同大学在学中に監督した『暁の石』がPFFアワード2014に入選。同年業制作の『ひとつのバガテル』がPFFアワード・2015に2年連続で入選、第16回TAMA NEW WAVE にノミネートされる。他に藝大で制作した『しじゅうご仁』『音日記』がある。